近代日本音楽を革新した

2024年は箏曲『春の海』の作曲者として知られる宮城道雄(1894～1956)の生誕130年にあたります。宮城は日本の伝統的な音楽に西洋音楽の要素を取り込み、「邦楽」を活性化するとともに「新しい日本音楽」をも開拓した音楽家です。トレモロ奏法やハーモニックスなどの新しい箏の技法を生みだすとともに、十七絃や大胡弓(宮城胡弓)などの新楽器も考案しました。作曲面では変奏曲やソナタ形式など西洋の音楽形式を取り入れる一方、独創的な旋律による描写性に富んだ個性豊かな作品を生みだしました。『春の海』はその代表曲です。また、箏とオーケストラの協奏曲や、子どものための箏曲作品(童曲)も数多く遺しています。こうしたことから宮城道雄は“現代邦楽の父”と讃えられています。

神戸生まれ、失明し箏の道へ

宮城道雄は1894(明治27)年、神戸の外国人居留地内（(現在の神戸市中央区浪花町）で生まれました。父が、外国人の経営する茶工場の責任者をしていたからです。出生時の姓は菅(すが)といい、「宮城」を名乗るのは結婚してからです。

生後間もなく目の病気をわずらい、8歳で失明の宣告を受けます。そこで将来に備えて、周囲の勧めにより、神戸の高名な生田流箏曲家に入門します。ここで驚くべき才能を見せ、わずか11歳で免許皆伝を得ます。師匠の代稽古も行うようになりました。

14歳で『水の変態』作曲

13歳のとき、家庭の事情から、当時 日本の統治下にあった朝鮮半島の仁川(じんせん)（現 韓国のインチョン）に渡らなければならなくなります。かの地では昼に箏、夜は尺八を教え、家計を支えました。

14歳にして処女作となる『水の変態』を作曲します。この曲は当時の朝鮮統監、伊藤博文に絶賛されます。

箏曲家として認められるようになった宮城は仁川から京城(けいじょう)（現ソウル）に進出。朝鮮箏曲界ですぐに頭角をあらわし、22歳で箏曲家の最高位である大検校(だいけんぎょう)となります。そして朝鮮にとどまることなく、“内地”で真価を問いたいと考え、1917(大正6)年、東京に活動拠点を移します。

しかし、近世以来の価値観や慣習を引きずっていた“内地”の邦楽界は宮城に冷淡で、作曲作品も容易に理解されませんでした。そのため宮城は苦難と困窮の日々を送らざるをえませんでした。

苦難を越えて第一人者に

ところが、明治以来の“西洋音楽礼賛”を見直し、もういちど日本に根ざした音楽を追求すべきであると考える音楽関係者らが、宮城に関心を寄せるようになります。箏曲に西洋音楽の要素も取り入れた斬新な作品をつくり、奏法でも工夫を重ねていることに共感したのです。そして1919(大正8)年、作詞家の葛原(くずはら)しげるらの後援で「第１回作品発表会」を開きます。これを機に宮城は一躍、注目を浴びます。25歳のときでした。

以後、宮城は、洋楽の技法も取り入れた新しい日本音楽の創作に邁進(まいしん)し、共鳴する洋楽作曲家の本居長世(もとおりながよ)、尺八家の吉田晴風(よしだせいふう)、同中尾都山(なかおとさん)（初世）、箏曲家の中島雅楽之都(なかじまうたしと)らとともに「新日本音楽」運動を展開していきます。新日本音楽は、その後の邦楽発展の起爆剤となりました。

西洋音楽の要素 生かす

宮城の作・編曲作品は箏独奏曲、器楽重奏曲、歌曲、協奏曲、合唱合奏曲、童曲(子どものための箏曲)…と多岐にわたり、生涯で400曲以上にのぼります。それらは音楽形式とリズム感が明瞭で、主旋

「春の海の作曲者　宮城道雄生誕地」の碑（神戸市中央区）　宮城道雄が生まれた神戸・居留地58番地の跡地(現　中央区浪花町56)の、三井住友銀行神戸本部ビルの敷地内に「宮城道雄生誕の地」の碑が建立されています。午前９時から午後５時まで30分おきに「春の海」のメロディーが流されています。